

最重度児を含む重度・重複障害児のスヌーズレン授業 に関する全国調査研究

-肢体不自由特別支援学校(知肢等併置校を含む)における実施状況の分析-

姉崎 弘

要旨： 肢体不自由特別支援学校の重度・重複障害児へのスヌーズレン授業に関する調査研究は 2015 年に発表されている。今回これまで報告されていないスヌーズレン室の設置状況や授業内容を中心に、全国 327 校の肢体不自由特別支援学校の小学部を対象に予備調査を実施した。調査時期は 2021 年 6 月から 7 月。調査方法は質問紙調査を用い回収率は 51.4%、168 校から回答があった。その結果、主に 1990 年前後からスヌーズレン室を設置して授業が開始され、2021 年現在 40 校(回収校の約 24%)に設置され、2012 年調査時に比べて 2 倍以上に増加していた。スヌーズレン授業の単元・題材名は「光遊び」「クリスマス遊び」が多用され、実施時期は 12 月の冬が最も多く、定期的な実施が約 3 割から約 7 割に増加していた。この結果、最重度児を含む重度・重複障害児へのスヌーズレン授業を実施する学校が年々増え続け、この授業の必要性が教師間に広く認識されてきたと考えられた。

キーワード：スヌーズレン(MSE)、スヌーズレン授業(MSE 授業)、肢体不自由特別支援学校、重度・重複障害児、最重度児

1. はじめに

これまで、肢体不自由特別支援学校(分校・分教室を含む)の自立活動中心類型(自立活動を主とした類型)に所属する反応の乏しい重度・重複障害児(寝たきりの要医療的ケア児である最重度児を含む)のスヌーズレン授業に関する質問紙調査は筆者が 2012 年に実施し、2015 年にその調査研究の概要を日本特殊教育学会で発表している¹⁾。しかしそれ以降、同様の調査はなく、今日まで年数が随分と経過していることからこの授業の取組みが変化してきていることが推測される。また全国のスヌーズレン授業を実践している教師からは、この授業の全国の現状や授業方法を知りたい、といった多くの声が寄せられている²⁾ことから、本研究において、約 9 年ぶりに、同様の質問紙調査(予備調査)を実施し研究結果をまとめることは、最重度児を含む重度・重複障害児の教育を担当する教師に対して、今後のスヌーズレン授業やこの子どもたちの教育のあり方に有益な情報提供を行うことにつながり、大変意義があるものと考えられる。

そこで、本稿では特に、これまで明らかにされていない、スヌーズレン室の設置学校数の推移、さらにスヌーズレン授業の内容(単元・題材名等)の設定および実施状況等を明らかにすることを目的とした。

なお、「スヌーズレン(Snoezelen)」の用語は、国際的に‘MSE(Multisensory Environment)’と同義とされ³⁾⁴⁾、特に英語圏では‘Snoezelen’は‘MSE’とも呼ばれて

いることから、ここでの「スヌーズレン授業」は「MSE 授業」とも呼ぶことができるが、本稿では、これを以下、「スヌーズレン授業」の用語に統一して述べることにする。

2. 方法

(1) 調査時期

2021年6月～7月

(2) 調査対象

調査対象は、全国の肢体不自由特別支援学校(知肢等併置校、分校・分教室を含む)の小学部を有する327校とした。対象校は「全国学校データ」(2021年⁵⁾)に基づいて抽出した。本調査では、小学部の自立活動中心類型(自立活動を主とする教育課程)で学習する比較的反応の乏しい重度・重複障害児(最重度児を含む)を対象とした。またスヌーズレン授業は、学校によっては「感覚学習の授業」と呼ばれることもあり、これも同様の学習活動を行っていることからスヌーズレン授業と同義と見なした。

今回、生活中心類型および教科中心類型の児童は調査対象から除外した。その理由は、五感である視覚や聴覚、嗅覚等に働きかけて対象児の発達を促すスヌーズレン(多重感覚環境)授業は「感覚遊び」に相当するため、重度・重複障害児や最重度児に取組みやすく、一方生活中心や教科中心類型の児童のニーズは比較的低いと考えられたためである。

本調査におけるスヌーズレンの説明は、質問紙に「一般に教室内をうす暗くして、対象児の好む光や音楽、香りなどを用いた多重感覚環境を教室内に設定して、教師と対象児との共感を重視して、主に対象児の情緒の安定や注視・追視する力、身体の動き、コミュニケーション力を引出す活動のことで、(英語圏では、スヌーズレンは多重感覚環境と呼ばれています。)」と明記した。

(3) 調査内容

前回2012年に実施した同様の質問紙調査は、肢体不自由特別支援学校の小学部・中学部・高等部の全学部を対象に実施したが、本研究では、前回の調査結果から、スヌーズレン授業の実施率が最も高かった小学部¹⁾のみを対象に調査を実施した。

主たる質問項目は、前回の質問紙調査¹⁾の内容を参考にして、1)スヌーズレン授業実施の有無、2)スヌーズレン授業の指導目標、3)スヌーズレン授業開始の年度、4)スヌーズレン室の設置年および設置校数、5)スヌーズレン授業の単元・題材名および実施状況、6)スヌーズレン授業実施上の意見と要望、の各項目である。

なお、質問紙の質問項目では、上記の1)～6)以外にも、たとえば、スヌーズレン授業を実施している教室名や使用した器材・用具名、この授業の教育的効果および配慮点等についても質問しているが、これらの調査結果については、誌面の都合で今回は割愛した。

(4) 倫理的配慮

質問紙調査を実施する上で、1)依頼書を学校長と回答する教師に、また質問紙を回答する教師に、それぞれ送付した。2)回答する教師に、回答に要するおよその所要時間とスヌーズレンの基本的な理解に必要な説明文を加えた。3)小学部で自立活動中心類型(自立活

動を主とする類型)に所属し、スノーズレン授業の実践経験を有するスノーズレン授業に理解のある教師1名に質問紙への回答を依頼した。4)学校名および個人名等の情報については守秘義務を守ることを、5)後日研究結果を各学校に送付すると共に学術誌に研究論文として発表すること、を依頼書にそれぞれ明記し、6)質問紙調査への回答および研究者への回答結果の返送をもって、本調査に承諾したものと見なした。

3. 結果

(1)質問紙の回収率

調査対象の327校のうち、168校から回答があり、すべての都道府県の学校から回答があった。回収率は51.4%であった。以下、割合(%)の前に書いた数値は学校数を表す。

(2)スノーズレン授業実施の有無

回答の多い順に、「現在実施している」80(47.9%)、「以前実施していた」55(32.9%)、「実施していない」25(15.0%)、「今後実施したい」7(4.2%)、「無回答」1(0.6%)、の計168校であった。「現在実施している」と「以前実施していた」の回答数を合せると、およそ8割の学校でスノーズレン授業の実施経験があった。

(3)スノーズレン授業の指導目標の設定(選択式・複数回答可)

回答の多い順に、「情緒の安定(リラックス)」128(25.5%)、「興味・関心の拡大」121(24.1%)、「注視や追視する力の向上」119(23.7%)、「身体の動きを引出す(スイッチ入力等)」74(14.7%)、「コミュニケーション力の向上」54(10.8%)、「その他」6(1.2%)、の計502校であった。したがって、主な指導目標は「情緒の安定(リラックス)」と「興味・関心の拡大」と「注視や追視する力の向上」の3つで約7割(73.3%)を占めていた。

(4)スノーズレン授業の開始年度とスノーズレン室の設置学校数の推移

以下の図1に結果を示した。

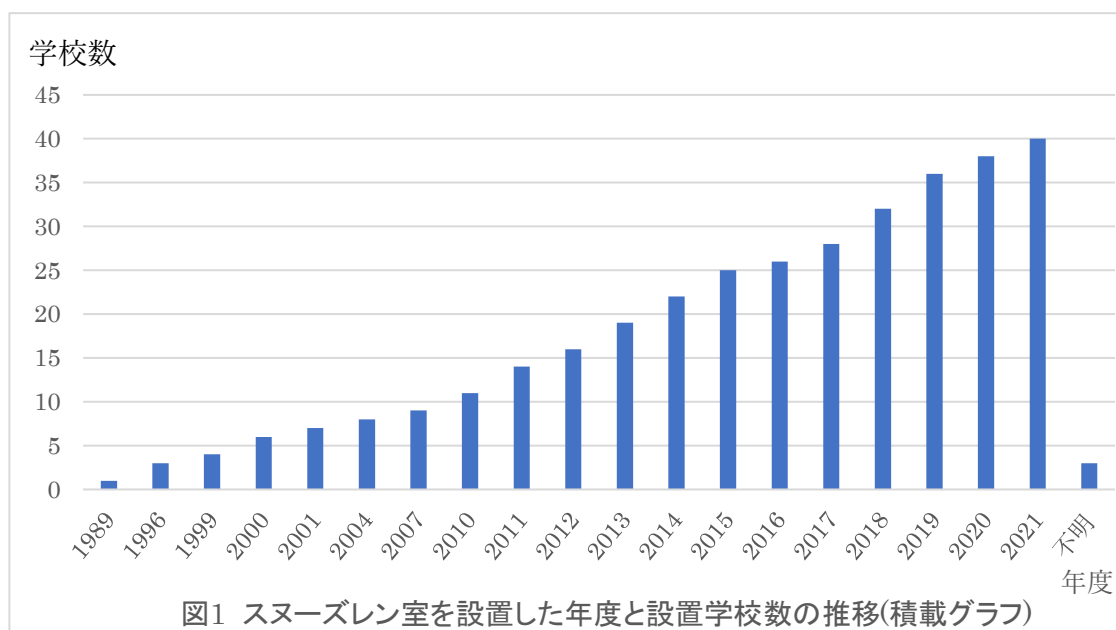


図 1 より、スノーズレン授業は全国でおよそ 1990 年あたりから、スノーズレン室の設置と共に開始されたと考えられる(スノーズレン室がないとスノーズレン授業の実施は困難である)。それ以降、年間に数校ずつスノーズレン室を設置する学校が増え続け、今日まで徐々に増加してきている。2021 年現在、質問紙回収率約 51% で、スノーズレン室を有する学校は 40 校であった。その内訳は、「1 室ある学校」が 37 校、「2 室ある学校」が 3 校であった。また設置年が不明の学校が 3 校あった。

(5) スノーズレン授業の授業内容および実施状況

1) スノーズレン授業の内容の設定

「単元や題材ごとに内容を変えている」63(50.0%)、「年間を通じて同一の内容で実施している」40(31.7%)、「季節ごとに内容を変えている」23(18.3%)、の計 126 校であった。したがって、「単元や題材ごとに内容を変えている」と「年間を通じて同一の内容で実施している」が約 8 割を占めていた。

2) スノーズレン授業の単元・題材名(複数回答可)

以下、同じような単元・題材名は、代表的な名称に統一して示した。

単元・題材名として、多い順に、「光遊び」24、「クリスマス遊び」15、「リラックスしよう」10、「音楽を使って(オルゴール等の CD 曲)・音楽の題材」10、「七夕まつり」10、「冬の季節を楽しもう(映像・音・音楽・風・冷たい感触を使って)」9、「自立活動」8、「映像投影の鑑賞(国語・音楽の教材に沿って、海の生き物、花火など)」7、「生活」4、「季節ごとの学習」4、「夏まつり(お化け屋敷など)・夏を楽しもう」4、「物語の世界を楽しもう(スイミー(国語の題材)など)」4、「スノーズレン室を活用して」3、「感覚の活用(外界の変化に気づく)」3、「国語」3、「ハロウィン」3、「香りを感じよう」2、「精神や情緒の安定」2、「暗室(暗くした部屋で)遊び」2、「光の国へ行こう」2、「水族館へ行こう」2、「ブラックシアター」2、「スペースワンダーランドで遊ぼう」2、「さまざまな光や音を感じよう」2、「見る活動」2、「星空を見てみよう」1、「温かい感触」1、「パネルシアター」1、「水と光の世界」1、「聞く」1、「感覚遊び」1、「音と光」1、「さわってみよう」1、「みてみよう」1、「体育」1、「光るボールプールを見よう」1、「ウォーターベッドに水を入れて」1、「スノーズレン遊びをしよう」1、の計 149 校であった。

この結果から、「光遊び」24、「クリスマス遊び」15、「リラックスしよう」10、「音楽(オルゴール CD 曲)を使って・音楽の題材」10、「七夕まつり」10、「冬の季節を楽しもう(映像・音・音楽・風・冷たい感触を使って)」9、「自立活動」8、「投影された映像の鑑賞(国語・音楽の教材に沿った海の生き物、花火など)」7、といった単元・題材名が多く使用されていたことから、特に「光遊び」と「クリスマス遊び」が多かった。

3) スノーズレン授業の実施状況

① スノーズレン授業の実施回数(複数回答可)

実施回数の多い順に、週あたりでは「週 1 回」111(57.5%)、「週 2 回」19(9.9%)、「週 3 回」3(1.6%)であり、また年あたりでは、「年 3 回」28(14.5%)、「年 1 回」

最重度児を含む重度・重複障害児のスノーズレン授業に関する全国調査研究
一 肢体不自由特別支援学校(知肢等併置校を含む)における実施状況の分析一

14(7.3%)、「年2回」13(6.7%)、「その他」5(2.6%)、の計193校であった。

週1回の実施は6割弱で、週1回～3回の「通年による定期的な実施」が全体で133校(68.9%)であった。したがって通年による定期的な実施が約7割を占めていた。一方、毎週定期的には実施していない、いわゆる「不定期的な実施」が約3割を占めていた。

②スノーズレン授業の実施時期

月別の実施校数(複数回答可)は、4月1、5月3、6月7、7月8(主に七夕の時期)、9月7、10月5、11月5、12月18(主にクリスマスの時期)、1月12(主に冬を楽しむ時期)、2月6、3月4、の計76校であった。したがって、年間を通じた通年による実施以外では、「クリスマス」や「冬」、「七夕」の各時期にスノーズレン授業を実施している学校が比較的多かった。

③スノーズレン授業の指導形態

指導形態は、「個別指導」17(11.3%)、「集団指導」93(62.0%)、「個別指導と集団指導の組合せ」40(26.7%)の3つに分類され、計150校で「集団指導」の指導形態が最も多かった。また集団指導の場合、学校によって違いはあるが、参加した教師数の平均は 4.2 ± 1.9 (人)、児童数の平均は 5.4 ± 2.4 (人)で、平均しておよそ教師4名と児童5～6名の計10名ほどの集団によるスノーズレン授業がなされていた。

(6)スノーズレン授業を実施する上での学校現場の意見や要望

以下、回答の多い順にまとめる。

- 1)スノーズレン授業の授業方法や評価方法を紹介してほしい 17(27.0%)
- 2)スノーズレン授業の現状および授業実践例の紹介をしてほしい 13(20.6%)
- 3)研修会への参加希望や専門性向上の必要・授業中の配慮を教えてください 9(14.3%)
- 4)器材の購入・レンタル・アフターケア・修理先の紹介をしてほしい 8(12.7%)
- 5)安価な自作教具の作成方法と教材・教具の工夫の仕方を教えてください 6(9.5%)
- 6)指導方法や授業展開・評価方法に関する研修の必要性 6(9.5%)
- 7)その他 4(6.3%)

(コロナ対策のため授業は実施不可になっていて消毒等が必要 2、持ち運び可能なサイズの器材が必要<訪問教育>)1、スノーズレンの教育的意義を立証する必要がある、子どもが増加しているため使用できる教室がなくなりそうである 1、4(6.3%)の計63校

4. 考 察

(1)調査対象について

前回の調査研究(2012年実施)では、小学部・中学部・高等部の全学部を対象に質問紙調査を実施した(質問紙回収率60.0%)が、本調査研究では、調査対象を小学部のみに限定した。その理由は、前回の調査結果から、他の学部と比較して、小学部において最も熱心にスノーズレン授業が教師たちによって実践されていたことから、小学部について詳細な調査を実施することで、スノーズレン授業の実施状況を細かく把握することが可能であり、その取組みの概要を大まかに理解することができる考えたことによる。

最重度児を含む重度・重複障害児のスノーズレン授業に関する全国調査研究 — 肢体不自由特別支援学校(知肢等併置校を含む)における実施状況の分析 —

以下、前回の 2012 年調査における小・中・高等部全体の回答結果と今回の小学部の回答結果とを比較するなどして論じることとする。

(2) スノーズレン授業の実施率

前回の調査では、スノーズレン授業の実施率に関する質問項目がなかったため、結果がなく比較はできないが、今回の 2021 年の調査では約 8 割(135 校、80.8%)の学校で、これまでスノーズレン授業の実践経験があった。また現在実施している学校数(80 校、47.9%)と今後実施したいと考えている学校数(7 校、4.2%)を合計すると、計 87 校(52.1%)の約半数の学校がスノーズレン授業を現在実践しているか、または今後実践したいという希望が出されていた。なお、以前実施していて現在実施していない学校(55 校、32.9%)については、その理由を尋ねていないため詳細は不明である。

(3) スノーズレン授業の開始年度とスノーズレン室の設置学校数の推移

今回の調査結果では、スノーズレン室の設置は 40 校であった。この結果は、回答した質問紙回収率が約 51%によるものであったことから、実際には全国でおよそ倍の約 80 校程度の学校にスノーズレン室が設置されていると推測される。この結果から、全国の約 330 ある肢体不自由特別支援学校中の 80 校に、すなわち全国の約 4 分の 1(約 24%)の学校に設置されていると推測される。前回の 2012 年調査では回収率 60%で 19 校にスノーズレン室が設置されていたことから、実際には全国で約 32 校に設置されていたと推測される。この結果からスノーズレン室は約 9 年間で 2 倍以上に増加したと考えられる。ただし、スノーズレン室には専用教室の他に「空き教室」やその時だけの「代替教室」が含まれる。

また前回の調査では 2 室設置されている学校はなかったが、今回の調査では 3 校の学校がスノーズレン室を 2 室設置していた。1 室しかない場合には、一度に多くの対象児を教室に入れて集団による授業を行うことは難しくなるが、2 室あると同じ時間帯に多くの対象児を学習する内容ごとにグループに分けて使用する教室を学習内容によって別にするのができ、指導をより効果的に実施しやすくなるメリットがあると考えられる。

また前回の調査では、スノーズレン室設置数の経年変化を明らかにできなかったため、図 1 のようなスノーズレン室を設置する学校数の経年による積載グラフを今回初めて作成することができた。今回の調査で、図 1 より初めて設置学校数が年々着実に増加してきた経緯を客観的に明らかにすることができた。

したがって、今日の在籍児が重度・重複化している主に肢体不自由特別支援学校現場では、スノーズレン授業が最重度児を含む重度・重複障害児のニーズに応じて「情緒の安定を促したり」、「興味・関心を引出したり」、「注視・追視を促したり」、「身体の動きを引出したり」する等、対象児の教育的ニーズから見て必要とされている教育であると考えられる。このことは、年々スノーズレン室を設置する学校数が増加してきており、中にはスノーズレン室を 2 室設置する学校も見られるようになったことから理解することができる。と考える。

(4) スノーズレン授業の指導目標の設定

主な指導目標としては、「情緒の安定(リラックス)」と「興味・関心の拡大」と「注視や追視する力の向上」の3つで、全体の7割強(73.3%)を占めていた。今日、対象児の障害の重度・重複化により、心身に強い緊張が見られたり、寝たきりに近い状態にあったり、医療的ケアを必要としたりする児童の増加、さらに普段の教室の授業で、人や物の注視や追視が困難で身体の反応が極めて乏しい児童の増加等により、指導目標として、対象児が無理をしないで普段の教室に居ながらにして、「情緒の安定(リラックス)を促す」や「興味・関心を広げる」、「注視や追視する力を向上させる」、さらに「身体の動きを引出す」活動に、比較的容易に参加することが可能なスヌーズレン授業が必要とされてきていると推測される。

(5)スヌーズレン授業の内容(単元・題材名)および実施状況

肢体不自由特別支援学校におけるスヌーズレン授業の内容と実施状況についてはこれまで報告されておらず、新たな知見といえる。

1)スヌーズレン授業の内容

本調査結果から、8割強の多くの学校が、スヌーズレン授業の単元または題材を設定して実施(50.0%)しているか、あるいは年間を通じて同一の内容で授業を実施していた(31.7%)。一方、季節ごとに授業内容を変えている学校(18.3%)も見られたが、全体的に見て比較的少なかった。

2)スヌーズレン授業の単元・題材名

多くの学校で、さまざまな単元や題材によるスヌーズレン授業の実践が行われていた。特に、光や音楽(オルゴール CD 曲)を用いた遊び、クリスマスや七夕といった季節の行事を楽しむ学習、心身のリラックスを促す学習、国語や音楽の教材に沿って投影された映像(海の生き物や花火など)を鑑賞する学習が主なものであった。

したがって、最重度児を含む重度・重複障害児にとって、やさしく、楽しい刺激である、比較的穏やかな光刺激や聴覚刺激等を用いて、心身のリラックスを促しながら楽しく授業に参加できるように配慮され、1年間の中では、特にクリスマスや七夕の季節の行事に合わせた学習内容が多く用いられていた。これらの季節の行事に関係した学習は、魅力的な色の光の視覚刺激や好きな音楽による聴覚刺激を併用した、まさにスヌーズレンを活用した楽しい学習活動を設定しやすいと考えられた。またクリスマスや七夕の学習は、自立活動の指導ばかりではなく、国語や音楽といった教科の学習とも連携させながら、投影されたさまざまな映像の物語(ストーリー)や BGM の音楽を鑑賞する学習も行われていて、自立活動の学習内容を中心として、児童たちの季節ごとの生活をより豊かなものにする生活単元学習の内容としても設定されていたと考えられる。

この結果から、スヌーズレン授業は、自立活動の指導を中心としながらも、他の国語や音楽等の教科や生活単元学習の授業の中でも必要に応じて取り入れられていたことから、自立活動の授業に限らず、さまざまな教科等の授業とも連携させた指導がなされていたと考えられる。

3)スヌーズレン授業の実施回数

今回の調査では、週日課に位置付けられた週1回の実施が6割弱(57.5%)で、週1~3回の定期的な実施が約7割(68.9%)を占めた。また毎週定期的には実施していない、いわゆる不定期な実施が約3割(31.1%)を占めた。前回の調査では、定期的な実施は約3割であり、一方不定期な実施は約7割であった。この結果から、前回の調査結果と比較して、週1~3回の定期的な実施が前回の約3割から約7割に増加すると共に、不定期の実施が約7割から約3割に減少していた。

その結果、スノーズレン授業の定期的な実施が大きく増加すると共に、不定期な実施が大きく減少していた。このことは、学校現場におけるスノーズレン授業の理解や指導効果が教師間に広く認識されてきた結果、この授業を実施する学校数や教師数が年々増えてきていると考えられる。この結果は、図1において、スノーズレン室を設置する学校数が年々増え続けてきていることから推測される。

したがって、スノーズレン授業による教育、いわゆる「スノーズレン教育」(姉崎が2013年に命名・定義している(姉崎,2013⁶⁾))が、最重度児を含む重度・重複障害児の教育で、今日教師にまさに必要とされてきていると考えられる。

4)スノーズレン授業の実施時期

スノーズレン授業を通年で実施していたのは約7割であったが、実施した月を見ると、年間を通じて「12月」、「1月」の実施が最も多かった。12月は「クリスマス」、1月は「冬の季節を楽しもう」といった単元名のスノーズレン授業をそれぞれ実施していた。

1年間の季節の中でも、特に冬(12月と1月)の季節は、光り器材や用具による目に鮮やかな視覚刺激や心に穏やかなオルゴール曲等の聴覚刺激や香り等を用いて、冬の季節行事に合わせて、最重度児を含む重度・重複障害児たちにもわかりやすい感覚的に楽しい経験を十分にさせることができ、その結果、児童たちに受け入れやすく、児童たちの発達を促しやすいのではないかと推察される。

5)スノーズレン授業の指導形態

指導形態として、62%の学校が「集団指導」で授業を実施していて、一方「個別指導」で授業を実施していた学校はわずか約11%であった。また約27%の学校が「個別指導および集団指導」で授業を実施していた。前回の調査¹⁾では、「集団指導」が73%の学校で、また「個別指導および集団指導」が21%の学校で実施されていたことから、今回は「集団指導」の割合が減少し、一方「個別指導および集団指導」の割合が少し増加した。

学校では、使用できる教室数や器材・用具の数が限られるため、個別よりも集団による指導の方が実施しやすいと考えられる。しかし集団による指導の場合、難点として指導目標や指導内容が児童一人一人の教育ニーズに応えることが難しい場合が考えられる。そこで、個別指導と集団指導の両者のメリットを組合せて、たとえば、授業の前半を集団指導で、後半を個別指導で行うなどして、児童個々の教育的ニーズにできるだけ応えようとする授業が展開できると考えられる。このように今日、個別と集団の両者の指導形態を上手に工夫して取り入れる学校が少しずつ増加してきていると考えられる。

(6)スノーズレン授業を実施する上での学校現場の意見・要望

これらの意見・要望の中で、特に「スヌーズレン授業の実践例の紹介」と「レンタル・アフターケアの紹介先」、「教材・教具(自作教材・教具を含む)の工夫の仕方」、「持ち運び可能な器材の必要性(訪問教育の場合)」、「スヌーズレンの教育的意義の立証の必要」の5点に関しては、学校現場でニーズの高い切実な課題になっていると考えられるが、今後の研究や調査により明らかにしていく必要がある課題である。

中でも、「スヌーズレンの教育的意義の立証の必要」に関しては、姉崎がこれまで「スヌーズレン教育の意義」についていくつかの論文で発表してきている(姉崎,2012⁷⁾; 姉崎,2013⁶⁾)。今後、学校現場でスヌーズレン授業を実施することのできる教室を最低限確保していくためには、教育委員会や管理職の校長等に「スヌーズレン教育の効果や意義」をよりよく理解してもらえるように、また同時に担当する教師の研修も推進することで、この教育のより科学的な実証と教師等への理解啓発活動の必要性が示唆される。

(7) 「スヌーズレン」の用語の使用について

最後に、今日国際的には 2012 年に「Snoezelen-MSE」の学術団体(本部はデンマーク)が設立され(<https://ISNA-mse.org>) (参照日: 2021 年 7 月 21 日⁸⁾)、‘Snoezelen’ と ‘MSE’ は同義語であるとされた。また論文においてもデータベースの Google Scholar で文献検索すると、‘Snoezelen-Multisensory Environment’ という、‘Snoezelen’ と ‘Multisensory Environment’ を同義であるとして両者を統合させた学術用語の論文タイトルが 1,850 件該当し(参照日: 2021 年 8 月 4 日⁹⁾)、多用されてきている現実がある。

わが国では、これまで「MSE」や「多重感覚環境」という用語は学校現場等でほとんど使用されてこなかったため、学校では馴染みが薄い。他方「スヌーズレン」の用語が頻回に使用されてきた実績があり、一般社会でもこの用語がすっかり定着している。そこで、今後わが国においては、「スヌーズレン」と「MSE」という用語を使用するに際しては、この両者が同義語であることを正しく理解した上で、社会に混乱を招かないように、「スヌーズレン」の用語を前に持って来て、これを「MSE」の用語と統合させた、新たな「スヌーズレン(MSE)」という用語を創出して使用するのが、国際的な基準から見て、より望ましいのではないかと考えられる。もちろん、わが国では、今までのように「スヌーズレン」と呼んでも差支えないが、正式名称は「スヌーズレン(MSE)」として理解する必要があると考える。この用語のあり方については、今後十分に検討する必要がある。

5. まとめと今後の課題

本稿のまとめとして、今回は予備調査のため特定の質問項目に絞って結果をまとめ考察したが、2012 年の前回調査と比べて、特に、スヌーズレン室を有する学校が約 9 年間で 2 倍以上に増加し、学校によってはスヌーズレン室を 2 室持つ学校が 3 校も見られたこと、さらに年間を通じて毎週定期的なスヌーズレン授業を実施している学校が約 3 割から約 7 割に大きく増加すると共に、不定期に実施する学校が約 7 割から約 3 割に大きく減少していたこと。この結果から、肢体不自由特別支援学校(知肢等併置校を含む)の最重度児を含む重度・重複障害児の教育においては、対象児の教育的ニーズからスヌーズレン授業の実施ニーズが徐々に高まり、毎週週日課に位置付ける学校が増えてきたと推測される。以上の結果から、今日最重度児を含む重度・重複障害児の学校現場では、今まで以上にス

最重度児を含む重度・重複障害児のスノーズレン授業に関する全国調査研究 —肢体不自由特別支援学校(知肢等併置校を含む)における実施状況の分析—

スノーズレン授業が必要とされてきていることが示唆された。

また、前回調査と比べて、本研究において、新たに以下の4点が明らかになった。

- 1)スノーズレン授業のおおよその開始年度とスノーズレン室設置学校数の推移
- 2)スノーズレン授業の内容(単元・題材名)の設定状況
- 3)スノーズレン授業の実施回数と主な実施時期、指導形態の状況
- 4)スノーズレン授業を実施する上での意見や要望とそれらへの対応

なお、今回の調査研究では、わが国のコロナ禍におけるスノーズレン授業の実施状況や問題点については明らかにできなかった。この点の調査と検討は今後の課題である。

そこで今後の課題として、今回の研究結果における課題も踏まえて、後日、本調査を実施して、特に以下の点を明らかにする必要があると考える。

- 1)コロナ禍におけるスノーズレン授業の実施状況と学校における対応や配慮
- 2)スノーズレン授業で使用している教室名や器材・教具名(自作教材・教具を含む)
- 3)対象児および担当教師へのスノーズレン授業の効果
- 4)スノーズレン授業の教育的意義の明確化
- 5)スノーズレン授業実施上の諸課題とそれへの対応策

文献および資料

- 1)姉崎 弘(2015)肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児のスノーズレンの授業に関する全国調査. 日本特殊教育学会第53回大会発表論文集,ポスター発表 P5-14
- 2)第4回スノーズレン研修会(2017年2月26日)参加者アンケート結果 ISNA 日本スノーズレン総合研究所ホームページ 研修会・機関誌案内 (<http://www.snoezelen-research.jp/seminar.html>) (参照日:2022年2月8日)
- 3)Verheul,A.(2017)Developments ISNA-MSE 2016. 中田康行・姉崎 弘共訳(2017)ISNA-MSEの発展2016年. スノーズレン教育・福祉研究,1,8-13.
- 4)Pagliano,P.(2017)Multisensory Environment and Snoezelen. 馬部啓子・姉崎 弘共訳(2017)多重感覚環境とスノーズレン. スノーズレン教育・福祉研究,1,15-18.
- 5)全国学校データ (<https://www.kyouikusolution.co.jp/>) (参照日:2021年3月1日)
- 6)姉崎 弘(2013)わが国におけるスノーズレン教育の導入の意義と展開. 特殊教育学研究,51(4),369-379.
- 7)姉崎 弘(2012)重度・重複障害児の自立活動における「スノーズレン教育」の意義について. 三重大学教育学部研究紀要(教育科学),63,297-314.
- 8)ISNA-MSEのHP (<https://ISNA-mse.org>) (参照日:2021年7月21日)
- 9)Snoezelen-Multisensory Environment (Google Scholarのデータベース)(参照日:2021年8月4日)

謝辞

本研究にご協力をいただいた全国の肢体不自由特別支援学校および知肢等併置特別支援学校、並びに分校・分教室の先生方に深謝申し上げます。また調査結果の確認作業にご協力をいただいた常葉大学教育学部数学専攻卒業生の小林 海氏に感謝を申し上げます。